RESEARCH FRONT
三重大学の研究最前線

1

幼児による母語の獲得から ヒトの「こころ」に迫る。

幼児は、どのようにして母語の知識を獲得するのでしょうか。
その過程には、ヒトに、そしてヒトのみに生まれつき与えられている
母語獲得のための仕組みが関与していると考えられます。
人文学部では、母語獲得の過程をさまざまな手法を用いて調査することで、
その背後にあるヒトの「こころ」の仕組みと発達過程を明らかにしようとしています。

人文学部教授
杉崎鉱司 すぎさきこうじ
博士（言語学）　専門分野は、母語獲得、生成文法理論

認知科学としての言語研究

「三重県出身の学生と教員」という表現を聞いた際、日本語の母語話者は2通りの解釈を与えることができます。一つは、「どちらも三重県出身の学生と教員」という解釈で、もう一つは「三重県出身の学生と（出身地が言及されていない）教員」という解釈です。一つの表現から2通りの解釈が生じるのは、我々の持つ内的な仕組みの働きによると考えられます。知覚器官を通して外界から取り込んだ情報に処理を加え、一定の解釈を生じさせる仕組みは「こころ」と呼ばれ、その仕組みと発達過程を解明しようとする研究分野は「認知科学」と呼ばれています。上記の例が示す通り、母語知識は、視覚や聴覚などと同様に「こころ」の一部門であり、母語知識の性質とその獲得の解明に取り組む言語研究である「生成文法理論」は、「認知科学」の一分野を形成しています。

母語獲得を支える先天的要因

ヒトの「こころ」のさまざまな領域について、その発達には先天的要因（遺伝により生得的に与えられた要因）と後天的要因（生後、外界から取り込まれる要因）の両方が関与しており、発達の過程はそれらの相互作用によって説明されるべきものであることが明らかにされています。「生成文法理論」は、母語知識の獲得も同様に、先天的要因と後天的要因の相互作用によって達成されると主張します。幼児が何語を母語として獲得するかは、生後の一定期間に何語の情報を経験として取り込むかによりますので、母語獲得における後天的要因の関与はほぼ疑いがありません。では、母語獲得を支える先天的要因とは、いったいどのようなものでしょうか。さまざまな言語を詳細に分析してみると、表面上の多様性にもかかわらず、共通する属性が存在することがわかります。「生成文法理論」では、まさにそれらが先天的要因の反映であると考えます。具体的には、母語獲得を支える先天的要因は、すべての言語が満たすべき性質を規定し、それにより母語獲得の筋道と到達点を狭く限定する「普遍文法」であると考えられています。

日本語の「なぜ」と英語の“why”

生得的な「普遍文法」に含まれる属性の反映と考えられている性質に、「なぜ」に相当する語に対する制約があります。具体例として、日本語の「なぜ」と英語の“why”を考えてみましょう。[例1]
日本語の文(3)は(1)にある二つの文をつなげたものですので、可能性としては、2種類の答え方が存在します。しかし、日本語を母語とする人は誰でも、(3)に対し、(1a)にある答えは可能だが、(1b)にある答えは不自然であると判断するでしょう。英語の母語話者も同様に、例文(4)に対し、(2a)にある答えは可能だが(2b)にある答えは不自然であるという判断を与えます。なぜこのような現象が起こるのでしょうか。「生成文法理論」における研究は、「『なぜ』に相当する語は、『～前に』のような要素で導かれる節の中に含まれる動詞と結びつくことができない」、という効果をもたらす属性が「普遍文法」に規定されていることによると考えます。

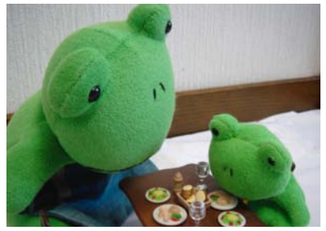
[例1]

(1) a. Q：なぜケンはポップコーンを食べたの?
　　A：おなかが空いていたから。
　b. Q：なぜケンはテレビをつけたの?
　　A：野球の試合が見たかったから。
(2) a. Q：Why did Ken eat popcorn?
　　A：Because he was hungry.
　b. Q：Why did Ken turn on the TV?
　　A：Because he wanted to watch a baseball game.
(3) なぜテレビをつける前にケンはポップコーンを食べたの?
(4) Why did Ken eat popcorn before turning on the TV?

「普遍文法」に基づく母語獲得研究

もし上記の制約が「普遍文法」の属性の反映であるならば、その知識は生得的に与えられているため、幼児は観察しうる最初期からその制約に従うことが予測されます。私たちの近年の研究の一つでは、この予測について、日本語を母語とする幼児37名（平均年齢5歳1カ月）を対象とした調査を実施しました。この調査では、2名の実験者が幼児のそばに座り、そのうちの1名が写真を見せながらお話を幼児に聞かせました。そして、お話の後に、もう1名の実験者が操る人形が、幼児に対して(5)のような質問を行いました。[例2]
お話の中では、ご飯を食べた理由として(5a)が、そしてお風呂へ行った理由として(5b)が与えられています。しかしながら、幼児は全員、(5)の質問に対して、大人と同様、「体が泥だらけだったから」と答えました。この結果は、母語獲得に対する「普遍文法」の関与の可能性を高めるものと解釈できます。

[例2]

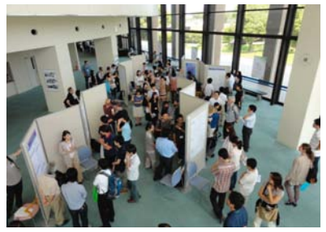


幼児を対象とした調査で用いた写真

(5) なぜご飯を食べる前にカエルさんはお風呂へ行ったの?
　a. カエルさんはおなかがぺこぺこだったから。
　b. カエルさんは体が泥だらけだったから。

言語の認知科学を通して「三重から世界へ」

人文学部の言語学教員は、2011年・2012年の2度にわたって、「生成文法理論」の国際学会（GLOW in Asia）を三重大学において開催し、世界各国の研究者が「普遍文法」の属性に関する最新の研究成果を議論する機会を提供しました。今後も、学内からの研究成果の発信に加え、“Mie University”を言語の認知科学における世界的拠点の一つにするための努力も続けていきたいと思います。



学会での研究成果の発信

この記事に関連した情報は右のアドレスでもご覧になれます。
http://faculty.human.mie-u.ac.jp/~sugisaki/